

きらわれ者と一人の少年

奄美市立節田小学校 五年 榊 さかき ココ

おいらはみんなにきらわれている。こつちに来ないでとか、早くいなくなれば良いのとか、あんたのせいで飛行機が止まったとか、停電になったとか。

そう。おいらは台風だ。みんなおいらのことはきらいだろ。でもおいらだって好きでめいわくかけているわけではないんだ。水が高いところから低いところに流れるように、おいらは気圧が低いところに、海水温が高いところに勝手に進んで行ってしまうんだ。

そんなある日のことだった。またいつもの島が見えてきた。おいらの通り道にある奄美大島だ。毎年何回かここを通ってしまうんだ。おいらの意思ではないよ。この島に住む人は昔、おいらが近づくとりゆうが来たとか言っていたな。

「どれ、りゆうのふりをしてみるか。」

おいらは雲をりゆうのようにうねらせて、まるでりゆうが空を泳ぐようにしてみた。

「ゴオォー。」

とうなるように風を巻いて、大空に尾をなびかせる。た

きのような大雨をふらし、かみなりを一つ落とすと、いならずまが走り、雲が真つ二つにわれた。

「おっと、やりすぎたかな。」

と思ったしゅん間、地上では悲鳴が上がる。その時だった。

「おい、台風。本当にりゆうなのか。」

「りゆうだったら、少しぐらい話せよ。」

だれかが言った。

「ん、だれだ。」

聞き間ちがいかと思ったけど、確かに聞こえた。声の主は、小学生位の男の子だった。島の北の方、山のふもとにある集落の、風に吹き飛ばされそうな小さな家の前で、おいらを見上げていた。

「りゆうなんだろ。」

「なんで毎年来るんだよ。なんで、畑をぐちゃぐちゃにするんだよ。」

おいらはしばらく、その子の前で止まった。もちろん、そんなこと本当はできない。でも、ちょうど台風の目に入り、辺りが静かになったんだ。いや、きつと少し話を聞いてやりたくなったのかもな。

「父ちゃんのミカン畑、去年お前が来たせいで全部ダメになったんだよ。」

「しお風で葉っぱがかれて……。」

「でも父ちゃん笑ってたんだよ。」

「自然には、かなわんつてさ。でも、くやしかったんだ。」

お前が来る意味が分からなくて。」

そう言つて、男の子はだまつた。

おいらは少しだけ、雲の間から光を落とした。山の上の方で、川がキラキラ天の川のように光っていた。昨日まで水が無かった川がおいらの雨で満ち始めていた。そこには小さな魚たちもどつて、泳ぎ始めていた。

「そこから見えるか。」

おいらはかみなりをまた一つ落とした。男の子の周りの雲がわれて、森が見わたせるようになった。木々がたおれていく一方で、かわいた地面が息をふき返しているのも見えた。そこにはアマミノクロウサギの足あとがあった。おいらが運んだ雨で、草がめぶき、土がやわらかくなり、やつらの食べ物もまたふえる。

「こわしているだけじゃないんだ。」

おいらは言葉にできない声で、そう伝えようとした。風が木の間をふきぬけ、島うたのような音をひびかせた。男の子はしばらくだまつていた。でもやがて、ぽつりとつぶやいた。

「りゅうつて本当は守り神だったのかもな。」

そしてふつと笑った。

「なら、来年は少しだけやさしくしてくれよ。」

おいらは風の尾をふった。それが返事の代わりだった。

よく朝、台風がすぎ去った空。雲ひとつなく晴れわたり、ミカンの葉は少し、しおでやけていたけど、その根元には新しい緑の芽がもう出始めていた。

男の子の父親は言った。

「今年もまた来たな、島に命を運ぶ、りゅうの風が。」

男の子は空を見上げた。風はもう遠く、北へ去っていた。でも、空には一すじの雲が、りゅうのような形で残っていた。青い青い空を真つ二つにわる天の川のように。

「また来いよ。」

「でも、もう少しだけ、やさしくな。」

男の子は空に向かってつぶやいた。